
猫になって

Cufe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫になって

【Nコード】

N9531M

【作者名】

C u f e

【あらすじ】

異世界トリップ？アルカディア？よくわかんないけど頑張ろうか！ってなお気楽主人公が逆ハー目指して進んでいくラブ（？）コメです

日常のささいな出来事（前書き）

処女作です。誤字脱字があったらご一報くださいm（
感想を頂けると励みになりますっ
—）m

日常のささいな出来事

毎日暇だ。

別に進学校に通ってる訳でもないし、受験生でもない。

ああ、フレッシュでもないね。高2だから微妙かな。

若さはあるつもりなんだけども。

何か目新しい物を探すのが癖になっている。

飽きっぽい性格は直す気がないのでそのまま。

でも。今のところは、探せば毎日些細な発見はあるんだ。

例えば今の季節、小さな桜の花びらが窓からひらりと舞い込んで、ノートの上ののっていたり。

壁にスマイルマークが書いてあったりとかね。

そんな穏やかな毎日が続いていた。友人には枯れてるとか言われるけど。

「ね、なんか買わない？マジで今金足りないんだよぉー」

昼下がりの教室、澄んだ声が響く。

私の悪友の鈴。髪サラッサラ、お目々クリックリのお人形さん。容姿だけなら。

でも性格は三枚目。いつも金欠で、一人フリマを開いている。

物がどれも質がよくてなかなか…じゃなくて。

「また？この前も同じようなこと言ってたじゃん。あの時のほ？」
「ああ、椎香？えへ、もう使っちゃったよ。」

この馬鹿は金遣いが荒い荒い。訳分かんないことに金使ってるからなあ。

「全く……今度は何に使ったん？」

「ブルガリの香水と、ときメモGSと、ナイキのスパイクかな？」
「おお、今回も脈略ないね！」

「そんなことより何か買わない？なんでもいいからさ！ね？」
「そうだね。」

何のかんの言って毎回何かしら買っている私も馬鹿かも。
ざっと机の上を見渡す。置いてある物は結構雑多だが、見る目は確かなのか大抵の物はいい。こういうところは素直に尊敬。

と。なんとなく、ネックレスに目が留まる。何だろうこの色？
綺麗だなあ。光ってる光ってる。

手にとって陽に翳していると、

「お姉さん、お目が高い！それはアレキサンドライトっていう石が
はまって、結構値が張るらしいんだよ！どう？どう？椎香なら5、
000円にしちゃう！」

「らしいって、自分で買ったんじゃないの？」

「この前道端で急に声かけられて、あげるって言われたから貰っちゃったんだ。だから実質タダなの。大丈夫だから！多分」

「お前さ、知らない人に物もらうなって幼稚園の時習わなかった？」
「うん？よく覚えてない。で、買う？」

怪しくても宝石に罪はないし、私はこれがめちやくちや欲しい。ちょうどさっき某Dランドで遊ぶ予定がなくなって、今手元に5、000円ある。明後日にお小遣いが支給されるはず。

この間約0.1秒。

「よし買った！」

はい5000円！と渡すと、

「毎度あり！ほいよっ」

鈴が満面の笑みで投げってくる。

「ありがと！」

パシッとキャッチして、鞆にしまった。

まだ売ってから帰る、という鈴を残し、一足先に帰ることにした。

家に着き、ベッドの上に未開封の宝石箱を置く。

鈴は気持ち悪くてつけなかったそうだ。

気持ち悪いって何が、と聞くと、

「くれた人とか…。」

だろうね。下心一杯で渡した男をさらっと流した光景が目には浮かぶ。
鈴はそんなやつだよ全く。罪作りめ。

というかそんな物貰う方も貰う方だが…私の手元に來たからいいか。

ベッドに倒れこんで、綺麗な宝石　なんて浮かれていたら、弟が急に入ってきた。

「姉ちゃん、飯だつてよ〜！」

ノックぐらいしろよ！と怒って誤魔化しつつ、箱を大急ぎでベッドの下へ放り込む。

カラスのような弟にとられたらもう終わりだ。
いつもなら取り返せても、親に適当な難癖つけられて奪われること
は分かりきってる。
だってこんなに綺麗だしね！

私は隠した箱をそのままに、リビングへと降りていった。
今日の夕食は何かな。

真夜中。

箱の存在をすっかり忘れはてて眠りこける私は、気付かなかった。

いつの間にか、箱がなくなっていた事に。

そして空中に浮かんだ宝石から出た柔らかな光が、一瞬私を包んだ
事に。

朝、目覚めると、なんだか体がダルかった。
激しい運動をした訳でもないのに。

試しに熱を測ってみると、37度5分。やっぱり微熱か…。

家には今、私一人しかいない。

両親は、職場が遠いので私より早く家を出る。今日は弟も部活の朝練だったつけ。

…じゃあ学校休んじゃえ！熱あるし。

という事で、ヨーグルトを食べて解熱剤を飲み、二度寝の至福を味わうことにした。

どの位寝たのだろう。陽はすっかり上っていた。

携帯を見ると11:20。二度寝始めたのが8時だから…結構寝たな。

体も楽になり、逆に軽くなったような気すらしてきた。

今50m走やったら6秒いけそう。でも本当に走ったらいつもの如く8秒後半、なんて悲しいので走りません。それに疲れちゃうし。

鼻歌まじりにお粥を作る。何しよう。暇〜暇〜

あ…桜。咲いてる。

よっしゃあ花見だ花見！とテンションが上がり、手早くお粥を食べ終えて部屋で着替えていると、机の上の宝石が目に入った。

忘れてた！あんな所に置いたんだっけ？

まあいいや、珍しく出かけるからつけていこつと。

その時は特に何も考えず、ネックレスをつけて外に出た。

こんな花粉のひどい日にくしゃみが出ないなんて変だった。でも天気予報を見ていない私は知る由もない。

ぶらぶら歩いて近くの広場に行く。平日だからか、ここがあまり知られていないからなのか、昼下がりの公園には人っ子一人いない。人いなさすぎだろ。寂しいよ。なんて独り言を言いながら、持参したビニールシートを敷き、桜の下に座つてのんびりと景色を眺めていた。

ふと気づくと隣に黒猫が。

首輪ついてないから野良みたいだけど、毛並みつやつやだな。何食つてんだろ。

「なあ、お前の名前、私が決めてやろうか。」

猫が、みゃー、と鳴く。これは肯定したってことで。

「うゝん。黒猫だし…女の子だからエドガーもアランもだめだよね…ポーちゃんはどう？」

一気にニャーニャーうるさくなった。失礼な奴。

ナデナデしていると、猫がふらつと向かいの道へ出て行ってしまった。

ツレないね、でもそんなところが好き。

また会おうね、ポーちゃん。あと、ク ヨンしんちゃんのぼーっとした子と名前似ててごめん。

後ろ姿を見送っていると、車の音がした。

こっちに近づいてる、と気づいた瞬間、無意識に走り出していた。

このままじゃ事故が起きると本能が警鐘を鳴らす。

あの猫は私が名前をつけたんだし。目の前で死んでもらっちゃ困る、せめて交通事故死だけでも回避したい。フラグなんて立ってない立ってない！

あっという間に猫に追いつき、掴んで放り投げる。

目前に大きなダンプの影が。

バンッ！

軽い音。

激しい衝撃で、意識が切れた。

猫助かったかな…。

日常のささいな出来事（後書き）

矛盾があつたので直しました。
すみませんっ（><;）

狭間に落ちる（前書き）

様子が上手く伝わってるかちょっと不安です。

狭間に落ちる

はっと気づくと、私は見知らぬ場所に横たわっていた。

ああ、ここが死後の世界かあ。

しばし、呆然。

親より早く死んでるしな……葬式で泣いてくれる人居るのかな……
生命保険は……家の鍵ちゃんとかかっているかな……ガス消したっけ……

「……！だから……！……で、あの子……。」

「自分で決め……！輪廻……！」

人が感傷に浸ってるってのにうるせえ……って……あれ？

「だから！起きたら本人に聞きなさいよ！」

なんだなんだ！と飛び起きたら、白いゆつたりした服を着た美人3

人が急に黙り込み、一斉にこちらを振り向いた。

怖っ！

「……何か聞いた？」

「いえ何も」

はい即答！美人の眼力には逆らいませんよ私は。

「……しゃあねえな。さっきの通りでいいな？」

と右はじのきらきらしている金髪イケメンさん。

「ええ……もう起きてしまったし。」

左はじの大人なムードのお姉さん。

「一人位なら平気だよ、お姉ちゃん達心配しすぎ!」
と真ん中のやんちゃ系赤毛の女の子。

ん?お姉ちゃんたち?…イケメンさんは女性でしたかすみません。
なんか…神様、かなあ。信じてなかったけど。
勝手に品評してすまん。

気を取り直して、お決まりの質問から行ってみよう。

「あの、ここは?」

「ここか?なんていうか…狭間だよ、神界と冥府と人間界の。んな事はどうだっていいからちよい話し聞け。お前、なんか変な物持ってるだろ。」

「いやよくないですし持つてな」持つてなかったらここには居ねえよ」すみません」

くそ、日本人の悪い癖が…

「ねえお嬢さん。これはどこで手にいれたのかしら?」

「え、えと、買いました。5000円で。」

要らん事まで口走ってしまった。恥ずかしっ

「円?ああ、なんて言ったかしらあの国…日本から来たのね。5000円ってどの位でしょう?」

「お姉ちゃん、家が簡単に買えるくらいだよ!」

それいつの時代？いや、都合いい勘違いだけど。

「まあ、じゃあこの価値がわかってるのね！」

価値とな？

「おい早とちりすんなよ姉貴。大体、なんでこれがコイツの世界にあるんだよ。」

「スミマセン、価値って？」

「お前は知らなくていい。」

ふ、とイケメン美女が大人美女に視線を送る。

大人美女が目を閉じ、ネックレスに手をかざす。なんか光っちゃったよ！？

「契約されてるわね…」

「けいやく？」

「満ちた月の夜。その光の届かぬ漆黒で、体と宝珠と間を置いて保つ。こんなことしなかった？」

昨日は満月でした。ベッドの下に突っ込んで寝ました。心当たりはバリバリあります。

顔に出ていたらしく、イケメン美女さんにため息を吐かれた。

「その上血までかかってる。全く…厄介だな。」

「あの、私はどうなるんでしょう？」

「消える。」

いやあああ！んなのゴメンだ！

「大丈夫。前世、つまり今持つてる記憶ね。それを失くして新しい生を受ければ問題ないわ。」

それ言ってること同じだよ。同じだよね！？

「大丈夫だよお姉ちゃん達。宝珠の契約が効くのはその世界だけだから、別の世界に飛ばせば平気！それにこの人、寿命終わってないよ。契約でついた力のせいで死んでるから。」

「あら。本当ね。」

「じゃ、生まれ変わらせるか。拾い物にはお礼一割、好待遇にしてやつから心配すんな。」

「好待遇ってどういうことですか？」

元の世界返せ！ってのはダメなんだろうな。話聞いてて思った。

「えっとね？普通の人間は死んだ後冥府に行つて、修行して、ある程度功德っていうか、経験値が貯まったら次の生を送ることになるの。ここまでいいかしら？」

ふむふむ。

「で、私たちが次の生の案内人って事。あなたが死んだ時、そのネツクレスのせいで引つ張られて私たちの待つてる場所に落ちてきたんだよ。だから普通修行後に合う筈なんだけど、急に会ってる状態なんだ。」

なるほど。

「輪廻の仕事は、次に生きる場所ごとに俺たちが分担してる。容姿

とか能力はくじ引きで決まる。後はランダムだ、ほら、天は二物を与えずとか聞いたことあるだろ？」

くじ…前世の私はくじ運が悪かったのか。て事は好待遇って！

「1人に3回引いてもらうんだけど、あなたは私たち3人のを1回ずつ引かせてあげるよ。だから9回ってこと。いい？」

好きな選ばしてくれないんだ。

でも、がんばろう！絶対ウハウハな人生手に入れてやる！くじで頑張るとかどうすりゃいいのかわかんないけどね！

狭間に落ちる（後書き）

くじって気合を入れても最悪のを引き当てることがありますよね。
神も仏もないです。（；；）

この子には頑張って欲しい。

新幹線、通路側の席を引き当てた私の代わりに（笑

くじ引き（前書き）

主人公がチートへの第一歩を踏み出しましたw

くじ引き

3人が3つずつ箱を持ってくる。まんまマジックボックスだな、見かけ。

「はいどうぞ？お引きくださいな。」

「ほら引け、早く。」

「はい、こっから取って？」

1枚1枚、念を込めながら引いていく。
これで9枚目だ！

「ん、じゃ開いてみせて？」

美女から引いたのが、

1枚目：精悍、男（アル）

2枚目：運動高能力（アル）

3枚目：超記憶（魔力無し）（アル）

イケメン姉さんから引いたのが、

1枚目：容姿端麗、女（ザナ）

2枚目：長寿（ザナ）

3枚目：魔力無限（ザナ）

やんちゃから引いたのが、

1枚目：眉目秀麗、猫、雌（桃）

2枚目：知能高（桃）

3枚目：長寿（桃）

私、超頑張った！！

でもさ、なんかさ、色々突っ込みたいけどさ、とりあえず

「私の種族はなんですか…。」

「猫と人はどっちだ？」

「人で！」

「男と女、どっちがいいかしら？」

「女をお願いします。」

「いいの？猫、変身能力つくくらい長寿になってるのにい。」

う…猫又か…捨てがたい。

「いいじゃない、両方あげるわ。どっちの姿にもなれるようにしておくから。」

「ありがとうございます。」

いゃん、お姉さんいい人！

その後色々あり、私の来世はこうなった。

- ・容姿端麗 猫＋女性（ザナ＋桃）
- ・運動高能力（アル）
- ・魔力無限（ザナ）
- ・超記憶（…今の記憶が引き継がれるだけらしい、アル）
- ・長寿（ザナ＋桃）

これはすごい。私ってチートじゃん。

「この桃とかアルとかは…？」

「それはね、それぞれの担当の世界のことよ。私が送る世界はアルカディア。」

「オレはザナドウだ。」

「あたしは桃源郷。」

アルカディアと桃源郷、同じ意味な気がする…。ザナドウもそうなんだろうな。

「私はどこに行くんですか？」

「あ、どこに行きたい？アルカディアは牧歌的よ。あなた達の言う中世かしら。」

「ザナドウは…かなり高度な文明の元で栄えてるといった所か。」

「桃源郷はもともあなたがいたとこだよ？だから送ってあげられない。」

マジっ！あんな所が桃源郷だったのか。ま、私の性にあってるのはアルカディアかな。

「アルカディアでお願いします。」

「そうすると、あなたはザナドウの魔力をアルカディアで使うのね…。使ってるものが違うけど呪文は同じだし平気だと思う…。もしかしたら副作用があるかも知れないわ。」

「副作用？」

「ん、お前たちは呼吸で酸素を取り入れて生きるだろ？ザナドウでは窒素を吸ってる。窒素は桃源郷の大気にも含まれてるから、ザナドウの生物が行っても大丈夫だ。分圧と大気圧がヤバイから死にけるけどな。それと同じで、ザナドウの魔力はアルカディアにもあるが、アルカディアで使える奴は殆どいないっつーこと。」

・・・難しい。死にかけるって、大丈夫？

「簡単に言うと、アルカディアでも気にしないで魔法が使えるってこと！こっちで調整しておくから、気にしないでいいよ。」

わかった！ありがとうやんちゃ系。何気なく一番頼りになるね君。

「じゃ、アルカディアへは私が案内するわ。さあ行きましょう？」

2人の神様もどき達と離れ、アルカディアへと広い回廊を歩く。

興奮？いやいや。

郷愁がマックスにきている。

地味＋刺激的な生活もとれる事なんてうまい話そうそうないだろ！！
と自分を励ましてみても、家族になんとも言わずに別れてきちゃった
んだと思うと、やりきれない。

何か感じたのか、美女さんに話しかけられた。

「ごめんなさいね、宝玉なんて知らなかったわよね。」
「いや・・・」

知らない。でも、この神様のせいじゃないんだろう。
なら責めたってしょうがない。

しょうがないんだ。せめて家族が泣いてなかったらいいと、そう思う。

うん。私らしくない。前を向いて行かないとね。

アルカディアについて、色々聞いておかないと。
改めて美人さんをマジマジと見る。

いやあ、このスッキリした鼻梁。涼し気な目元。加えてやたらとセクシーな唇。

髪の毛はつやつやで真っ直ぐに腰まで流れている。たまらないね、男だったらず落ちる。

やっぱ男になっても面白そうだったかな…。

「どうしたのかしら？」

不躰に眺めすぎたらしい。不安そうな瞳で私の顔を覗き込む美人さん。

いいねそのアングル。男だったらイチコロだよ。

「や、髪の毛綺麗だな、と。」

それだけじゃないけどね。

「そうなの、わかる？こたわってるのよー！」
いきなり目が輝く美女さん。

ははは、まさかの地雷？話長くなる？まいつか。

「もう5000年位前になるかしらね。すごく尊敬している方に髪の毛を褒められた事があったのよ。まあすてきな御髪ね、って。でもう気合はいつちゃって。」

尊敬してるって誰なのか聞きたい所だがそれはいい。
お姉さん5000歳超えちゃってんのかぁ。ひえ。

「トリートメントとか使ってるんですか？」

「鳥居とメンコ？いいえ、なにか関係があるの？」

「いや、そうじゃなくて、トリートメントって言うのは…」

ダラダラと雑談をしながら、ついでにアルカディアの基礎知識もきいた。

聞くところによると、私はイレギュラー過ぎて神様（本人達否定）もどうなるかわからないそうだ。

あんまり思わせぶりなフリは入れないで欲しいと心の底から思ったことは言うまでもない。

進んでいくと、大きな石のアーチと木の扉があった。
どっしりとした荘厳な蔦の模様が浮き彫りにしてある。

「着いた。ここが入口よ。さあ、行ってらっしゃい。今回はおまけもつけてあげる。」

え、おまけって…？と待って待って！
ちょ、まだ扉開けてないでしょ！

背中を押され扉に顔をぶつける、とおもいきやスルリと抜ける。

そこは眩しいほどの光に照らされたトンネルだった。コケそうな体勢のまま、私はより強い光の差している方へと、引っ張られるように歩を進めていった。

そしてどんどん光が強くなって、もう何もかもがわからなくなっていった……。

くじ引き（後書き）

よし。アルカディア行ってみよう！

ハイテンポすぎるでしょうか？

作者自身、悩むのが苦手で深く考えない性質でして…

シリアスモードは最小限に抑えたいと思います！

行き先（前書き）

ちよつと不安ですがアップします。

先が見えない… 何時になつたらヒーローが出てくるのか…

行き先

いつの間にか、私は落ちていた。
え、落ちていた！？

ぼすん。

「にゃ〜！」

まさかの初期装備は猫形態か…。
生まれ変わってもいないみたいだし…あれ、もう尾が二股になっている。
る。

ここの時間は午後みたいだ。木漏れ日が差している。綺麗なところだ
なあ。

あたりを見回していると、白い紙切れがあつた。なにになに。

”これを読んでるって事はうまくいったみたいね。

今のあなたはすべての言語が使えるわ。褒めてくれたお礼よ

「語で喋りたいと考えれば変えられるし、基本は聞く相手に合わせる
ようになっています。プラス、死んだ時の年齢のままなの。これ
もおまけ！

もつとも最初は猫だからわからないかしら。

猫の姿はあなたが救った黒猫ちゃんの姿で、とても可愛らしいのよ！
変身する時の魔力の使い方は、ぎゅっ、ぱんって感じ。簡単だから
心配なくていいわよ。

じゃあ頑張つてね。”

知らないうちにチート性能がアップしてたみたいだ。
いや、それよりぎゅっ、ばんってどうやるんだろ。

とりあえず中二っぽく目からビームみたいなイメージで…

イメージで…

…熱っ！目が熱い！目は駄目だ、洒落にならん。
じゃあ、二股の尾の先に集める感じで…いい感じかも、なんか気持ちええ…

尾の先にじんわりと温かみが集まる。そこから一気に体中に広げる
感じで気合をいれた。

人間〜にんげん〜NINGEN〜！！！！

シュルツ…

効果音が変だが、人の姿になったっぽい。
やった、あんなおざなりな説明で変身を会得したぞ！

…でも全裸だ。ちょっとこれはひどい。うん、まあ人間…そう人間…。

ソッコーでTシャツとジーンズを思い浮かべて化け直しました。すみません。

どちらにしろこの世界の服がどんなものか知らないし、多分この格

好のままじゃだめだろうな。

格好といえば、私は「容姿端麗」を貰っていたはずだ。自分の顔が見たい！

ここはかなり重要なパーツだろ。第二の人生において。

鏡、鏡！ そうだ水鏡！ その辺に泉はあるかな？

ひとまず動きやすい猫になって、野生の勘の赴くまま泉を探、せたらいいけどそんなないので水のコポコポいう音が聞こえてきた方向に駆けていく。

あの3つ（容姿、運動能力、魔力）以外は標準スペックなんだな。異世界補正とかないのか。

あ！ 泉発見！

きれいな水だな。さすが牧歌的というだけある。

さつと人に化ける。ヤバい、上達が早すぎる。天才かも！

・・・自分をおだててどうする私。

ひとまず顔だ顔。

どれどれ…

っ、これは……！

水面には、非常に、ヒツジョーに可愛い美少女が映っていた。サラサラと風に流れる黒髪に、涼やかなブルーブラックの瞳。顔の輪郭もシャープで絶妙なバランスを醸し出している。

うん、まごうことなく容姿端麗だ。

ちよっとタレ目なのも我ながら愛嬌がある。

でもさ、どう見ても15歳以上には見えんよ。

ここでもまた日本人クオリティーが発揮されたか？お姉さん私を何歳だと思ってるんだ。

まあ、外見だけだし化ければいいか。他の人にも化けられるのかな？

試しに、アルカディアに案内してくれたお姉さんに化けてみる。

…なんか少し違うけど（主に胸の大きさとか）コレくらいならイケる！

何も考えないで化ける本来の姿より、なんとなく暑い感じがするのは魔力とやらを使ってるんだろう。大したことないんだけどね。

ついでに男にもなれることを確認。

背が高いってこんな世界なのかと感慨を覚えたよ…ホント背が低いってやるせない。

一通り試してみて少しつかれたので、エネルギー消費の小さいらしい猫モードになった。

なんだかんだ言って、猫って案外楽でいい。

尾を一本にしなきゃ怪しいのが難だけど。

因みに私はロシアンブルーみたいな猫らしい。ポーちゃんと同種。美猫だね。でもポーちゃん程黒くない。灰色の方が正しい気がする。

その後。

泉の木陰に座って今日の予定を立てることにした。

さて。普通ならここで王子とか騎士が来るのを待つのがセオリだが、生憎と私は猫なので一目惚れされることはない。万が一拾われても下手に政情の安定してない国行ったら危ないし。

どうせなら調べ上げてイケメンの王子様（無論騎士団長）で優しくて、養ってくれて、優しくて（大切なので二回言いました）、頭も冴え渡ってる人の所に自分から拾われに行つてやろうじゃないか。ははは、この美貌をもってすれば如何な聖人君子でもゲット可能だぜ。

てな訳で、街行ってみよう！これもまた王道の一つだし！ギルドとかあんのかな。理想の王子の情報を集めなきゃね。そうだ、服装も調べとかなきゃ。

とりあえず最初の目標は優しくて格好良い王子様をみつける事、かな。

街に出ないことには話にならん。よし、レッツゴー！

気の向くままに小径を歩いていると、標識があつた。
見慣れない文字を見て、「サイス1km」「5kmニネベ」と

読めた時は悲しくなった。

英語の勉強とかまるで無駄か。

どっちに行こうかなあ。

近い方でいいか。サイス行こう、サイス。

左の道を選び、のんびりと森の散歩を楽しみながら行くことにした。

サイスってどんな所かな…大都市は嫌かも…。

行き先（後書き）

因みに作者は田舎に住んでおります。

名前は少し凝ってみましたv

小ネタです。わかった貴方は素晴らしい！

魅力の効果（前書き）

ふわっとした猫も好きですが、すらっとした猫が好み。
ってどうでも良いですね。5話ぐっぞ。

魅力の効果

い、い、嫌ああ！ついてこないでえええ！

後ろを振り返ると猫の大群。

猫好きだよ、可愛いよ、でもここまでくるとシニールとしか言いようがないよおお！

こんな事態に陥ったのは1時間くらい前。

森の小径を歩きながら、このままじゃ着かない気がする…と焦っていたら、

薄暗くなった頃、ようやく前方に明かり発見！！猫って歩幅小さいなあ。今更だけど。

迷子にならなかった…じゃなくて街についた嬉しさで、にやあにやあと鼻歌を歌いながら駆け込んだ。

おお、中世ヨーロッパ！万歳！

石畳の道路に感激していたら、いきなり前のめりになってズッコケて、頭を打った。

痛たたゝ、と思って起きあがり、振り返るとオスらしきトラ猫が。

眼光鋭い。ギラギラして。

流石に猫のガン飛ばしはモノホンみたいだな、と呑気に構えていた。

・・・でも、何か変だ。気持ち悪い。

じりつと後ずさる。と、ジャンプしてきた！

ええええええ！！いやあああ！！

飛びかかってきたトラ猫をとっさにかわし、とりあえず猫パンチを顔面にお見舞い。

私を怖がらせた罰を受ける猫め！

そして走る走る。ヒット＆ランが勝利の鍵さ！

面食らったような様子の猫。そして諦めるかと思いきや、

「にゃおくん！！」

遠吠えした。遠吠えしたよコイツ！犬かおのれは！

ここで話は冒頭につながってくる。

猫の一匹狼なプライドをどこに捨ててきたんだ、いや狼はイヌ科だけど、と怒りながら走っていたら、あの猫の子分達が回り込んでいたらしく、前の通路を塞がれた。

勘弁してくれー！！！！

『お前だにや、親分が呼んでるのは。さあ行くにや！』

『来にやいとどうなるかわかってるにや？』

語尾がにやあにやあウルせえ！オスがやっても可愛くないから！でも、そうか、猫同士言葉が通じるんだ。説得できるかも。

『私じゃにやいにや、さつき怪しい奴がそっちに走って行って、追いかけたけど見失ったんだにや。手伝えにや！』

私、乙。なんて貧弱な言い訳なんだ。

『わかったにや。』

よしきた！やーいバーカバーカ

『一緒に追うにや！』

え、マジですか！

じゃあ、

『二匹いたにや。一匹はあっち、もう一匹はそっちにや！私はこっちに行くからあっちを追って欲しいにや！』

苦しいな……。でもこの子たちは愛すべきオバカさんだからいけるだろう。

『じゃあしょうがにやい、先に行くにや。親分は短気にやから早く見つけにやいとだにや。』

やったー！！お人好しで良かった！

『頼むんだにや！』
ダメ押しダメ押し。

二匹が駆け去った後、ふと気づく。

あれ、もしかして親分猫も猫又で超絶イケメンとかいう設定？私が勘違いしたのか？
実はイケメン王子の親友、みたいな。

『お姉ちゃん』

ここは大人しく捕まってみるべきだった？でもさっき殴っちゃった
しなあ。

『お姉ちゃん！』

第一印象悪すぎだろ。いや、そこから和解するルートもありっちゃ
あいか。
なぐんで、有り得ないね。これからどうしよ。

『お姉ちゃんってば！』

『うえっ！どどど、どうしたんだにゃ！』
びっくりした。下らない詳細設定考えすぎてた。噛んじゃった
じゃないか。

『にゃ、って…まあいいけど。僕について来て、早く！』

わあ、可愛いなコイツ。後10年経ったらお姉さんとこおいでって
感じ。

アビシニアンっぽい。毛並みがつやつやしてるから飼猫なのかなあ？

ぽけーっと考えこんでいたら、子猫が急に森の方へ走り出したので、
大急ぎでついていく。

可愛い見かけによらず俊敏だね。

ま、神様お手製チートの私には勝てないだろうが。と思考が脱線し、
なんで追いかけてるのか欠片も考えず哄笑。^{ニヤニヤ}

持ち前の（というか貰った）運動神経でバネをきかせ、抜き去った。

ついて来いって言うてくれた相手抜いちやだめじゃんよ私。

大人げ無い行動を恥じてその場に立ち止まり、彼を待つ。

まもなく追いついてくる子猫。

『お姉ちゃん？足大丈夫？早く！』

ええ子やなあ！

気にした様子もなく、さっきと同じペースで走っていく。

しかも足気遣ってくれるなんて。嫁に欲しい！

その後、入り組んだ路地を走りまわって気づいた事が一つ。

神様は運動神経よくしてくれたけど、体力は普通のまま。

あつという間に息だけ苦しくなり、もう子猫ちゃんに声を掛ける余裕は消え失せた。こんなことならもっと早く話しかければ良かった。というか調子乗ってさっきのくだりを何度か繰り返し、全力ダッシュしまくったのが悪いのか。

何にしても私はぜいぜい言いながら走っているのに、子猫が息一つ乱していないのを見ると切ない。

ふと子猫が立ち止まった。周りをさつと確認する。

『着いたよお姉ちゃん。とりあえず早く中に入って。』

はああ、ようやく着きましたか！って、ここ？

いやん、ムーミのお家みたい！可愛い！

狂喜している私を尻目にさつと入っていく子猫。

え、行っちゃうの？待って待って、置いて行かないで！

周りが花壇に囲まれた、綺麗な白い石畳の小路が木の扉へと続いている。

ああもう……いい！最高だ、私ここに住みたい！

子猫に続いて扉をくぐる。

『おい、どうしたんだキット？客か？』

目の前にいたのはスラリとした黒猫だった。

声も深みがある。人間ならさぞかしイケメンなことだろう。

『追われてたから助けてあげたんだよ。』

ありがとうキット君。名前可愛いな、英語からとってる？訳ないか。英語ないもんね。

『はあ…新入りか？』

あれ、この黒猫どこかで…

『うん。そうみたい。慣れるまではここに置いてあげて欲しいんだ。ここ何年か、ここに来た猫なんて僕ぐらいでしょ。師匠のボケ防止にもなるって！』

『師匠って呼ぶな。それに俺はそんな年じゃない。』

あ！わかった！ポーちゃんにそっくりだこの黒猫！

『ポーちゃん！！生きてたんだにや！良かったにや〜！』

生き写しだ、いや本人…本猫だ！

『おいキット！コイツ本当に新入りか？下町言葉が染み付いてるぞ。』

命の恩人をナチュラルに無視するな！

『うん…よくわかんないんだけど…真似してるだけじゃないかな。』

『しょうがないな…お前！』

『うす！』

なんだなんだ、つい反射的に敬礼しちゃったよ。恥ずかしいなもう。まだ息切れも直ってないのに。

『にやーにやー言わなくていい。耳障りだ。』

『はい…』

私も好きでやってないって。猫ってこんなものかと思ってノリでやったんだって。

楽しかったけど。

『で、お前は どうしてここに居る?』

だからさっきキット君が言っただろ。貴様人の話聞いてないな?

『追いかけられて...』

『じゃなくて、どこから来た?』

ああそっちな、鋭いとこ突いてくるな。

違う世界から。と言える雰囲気ではないので、というか信じてもらえる気もしないので、

『ニネベから来ました。』

標識で見かけただけの街ですが。

『ニネベ? 森の向こうのか? お前、森を越えてきたのか?』

『えっと...お姉さんが...』

標識の近くに落としたんです。

『そうか...。今じゃニネベも戦地になってるようだな。姉がな...。』
よくわからない勘違いしてるみたいだけどいいか。
疲れたし。

いや駄目だ、キット君涙ぐんでる。すまん! この世界には私の家族はいないんだ!

『家族はこの世界にいないんです。』

自分のせいでもないのにキット君への罪悪感でいっぱいだ。勘違いポーめ!

『...そうか。もういい、大丈夫だ、しばらく泊まっていけ。それ位しかしてやれないがな。』

いや、そういうことじゃなくて、...もう面倒だ。頭がクラクラする。

泊めて貰う以外、道ないじゃんどうせ。

ポーちゃんにお礼を言おうと頭を下げたとき。
視界がグラツとした。

あれ、なんだか目の前が暗く…？

『おい！？どうした！おい！』

私の名前は「おい」じゃない…と思ったのを最後に、私は気を失った。

魅力の効果（後書き）

人の名前忘れちゃった時、「ねえ」で誤魔化しませんか？
しません？

一度話ただけだと覚えられないんですよ。

新能力

side キット

あれ、見覚えがあるかも知れない。

そう思つて、逃げている猫を追いかけてみた。けど人違いだったみたいだ。

眺めていると、その猫は前を塞がれ立ち止まった。

あ。。

銀色の毛並み。

見たことがある。

よくわからない、なんでか見たことがある感じがした。助けなきゃ、と思つた。

きつと初めて街にきた猫なんだろうし、師匠もきつと匿^{かくま}ってくれるだろうから大丈夫だろう。

よし。

『お姉ちゃん』

彼女は何か考え込んでいるらしく、返事がなかった。

『お姉ちゃん！』

まだ考えにふけている。追いかけてるのに余裕だな、あのお姉ちゃん。

いい加減気づいてくれないとあいつら戻つて来るのに。

『お姉ちゃんつてば！』

軽く風に魔力を乗せてみる。

相手の魔力で軽減されちゃうけど、普通はこの強さなら肩を叩かれたくらいにしか感じない。はずだ。

『うえっ！どどど、どうしたんだにゃ！』

やっと気づいたみたいだけど、なんでか変な訛りが入ってる。

『にゃ、って…まあいいけど。僕について来て、早く！』

急いで駆け出す。師匠の家を目指しつつ、万が一の為に方向が分からないよう遠回りした。途中何度か抜かれて驚いた。でもゼエゼエ言ってるからやっぱり辛かったみたいだ。

散々路地を走り回った後、師匠の家に連れていく。師匠の家は防犯設備がいっぱいあるから引つかからないか不安だったけど、彼女は気づいているのかいないのか、自然体で入ってきた。

・・・僕は物凄い手練を誘い込んでしまったのかも？

でも師匠が、僕が来たことには気づいたのに彼女が居ることがわからなかったみたいだから、つまり、師匠がいつもかけてる“サーチ索敵”が感知しないくらいに魔力が弱いつてことだろう。

それに戦士系の体軀でもないから…。

師匠に彼女を会わせた。

師匠の顔が厳しくなる。匿ってくれるか少し不安になったけど、事情を聞いてあげているからきつと平気。あの時みたいに渋々でも泊めてくれるだろう。

彼女の話によると、二ネベから姉と共に逃げてきたそうだ。1人きりなのを見れば、もう後は分かる。辛い旅だったみたいだ。天涯孤独になっちゃった猫なんだと思うとすごく可哀想だった。最近の二ネベの荒れようは僕でさえ知っている。

ここでゆっくりすればいい、なんて考えていた。
本当は、そんな悠長に構えている暇なんてなかったんだ。
気付いたのは、気丈に振舞っていた彼女がパタリと倒れてからだった。

え、そんな、だって・・・。

慌てる僕を落ち着けるように、
師匠が静かな口調で言った。

「体力の消耗が異常だな。相当気を張っていたようだ。キット、布団に運ぶぞ。そこで治癒魔法を掛ける。」

走っていたのは、きつと無理をさせてしまったんだ。僕が、倒れさせた……。

「何してる、早く運ぶぞ。俺の背中に乗せろ！」

そうだ。早く運ばなくちゃ。

ぐいっとこぼれかけた涙をぬぐい、軽い彼女をくわえて師匠の背中に乗せた。

柔らかな日差しと、小鳥のさえずりが聞こえる爽やかな朝。
爽やかな風が、ゆるりと顔を撫で過ぎる。

そんな気持ちの良い一日の始まりに、私は頭の鈍痛で目を覚ました。
ここどこ…、誰か頭痛薬とって…。うつうつ。

『あー！お姉ちゃん起きた？頭は平気？』

ん、おかしくはなっていないかな…？えっと、誰…。
ああ、猫、うんと、そう、ピット…？君…？
ごめん後5分寝かせてくれ…。

って！違う違う！何言ってるんだよ私は。キット君だ。
スマブラやりすぎてんな。

ひとまず起き上がり、ふかふかのクッションの上で伸びをする。な
かなかいい気分だ。
でもここどこだろう。干し草というか、お日様というか、暖かい匂
いがする。

『キット君？ここどこかな？』

記憶が途切れててわからない。この部屋に案内されたっけ？

『お姉ちゃん、覚えてないの？倒れちゃったんだ。すっごく心配したんだから！師匠も心配してたんだ、もう丸3日も寝てたよ！急いで寝室に運んだんだ。』

『ごめんね、誰かの寝場所とっちゃったかな。』

絶対キットかポーちゃんが寒い中寝たに違いない。

『平気、師匠は寝場所がいっぱいあるから。待ってて、今呼んでくる！』

ポーちゃんの寝床か…。まいいや、いつてらっさい。

と思ったら急にこちらを振り返り、

『お水はそこだよ』

…重ね重ね申し訳ないです。

程なくして、ポーちゃんを連れてキット君が戻ってきた。

スルツと足音も立てず近づいてくるポーちゃん。猫すげえ。

『おい、大丈夫か？3日も寝込むなんて。』

『すみません、私も何だかよくわからなくて。でも体調は万全です。』

『ああ、見る限りは大丈夫だな。後、一つ聞きたいんだが、』

ぐぐうう、きゅるるる

・・・遮ってごめん。

うゑ恥ずかしい。

『…とりあえず食事が先か。』

『手伝います。』

『いやいい。用意したらキットに呼ばせる、下に来い。歩けるだろう？』

『はい、ありがとうございます…。』

下手に病人扱いされなくて良かった。でもキット君が半泣きになってまで笑いをこらえてる姿に泣けてくる。

そして2猫ともいなくなり、私だけがぽつんとクッションの上に座った状態で残された。

えゝと。これはもう一度寝とけて意味？もう眠れないよ、3日も寝こけてたんだから。どうしようかな。

んゝ。魔法の使い方とか考えるか。

マダンテとかやったらどうなるんだろ。

止める。

！！キラキラしいイケメン美女神さん！

なんだよその呼び名は…

ここザナドウじゃないよイケ神さん。

縮めるな！

ニユースを教えて？池さん。

いい加減名前ネタ止める。それと、マダ…何とかなんて考えるな。

マダンテは駄目なの？

ああ。魔力全放出だろ？魔力は生命力と直結してるから、使えばお陀仏か良くて瀕死だ。その上お前の魔力じゃこの星ひとつ焦土と化する。瀕死で生きられる環境じゃねえな。
ひええ！マジか！

実は今回、姉貴のミスを伝えに来たんだ。お前の魔力は俺の担当だからな。

ホワツツ？もう十分良くして頂いてますけど？

ああ、能力に大して違いはない。というよりは得してる。容姿の問題だ。

人間の姿は完璧でしたけど？やっぱり何かの間違いだったんですか？主に年齢で？

人間の姿はあれでいい。猫の方だ。黒猫って言ったらしいけど灰猫になってるだろ？
そっちか。

それは別の猫の姿だ。輪廻の時に入れ替わっちゃったみてえだ。どの猫と入れ替わってるかは分からない。もつとも、見かけだけで他は何も無いんだ。んゝ、お前はちよつとアルカディアの魔力が使えるようになった。それもかなり低レベル、下の下か。

え！じゃその誰かさんは困ってるんじゃない？

だから、容姿だけだと言っただろ。肉体維持に必要なアルカディアの魔力が器である肉体に付随していた、それをお前が貰った。相手にはお前の肉体がいったから、肉体魔力はないはず。というか要らない。桃源郷の体だからな。

えっと、よくわかんね、その猫はどうなるの？

ほとんど害はねえよ。実際気づいてから3人で手分けして探したがな、異常はなかったよ。

ごめんやつぱよくわからん。つまりどういうこと？

はあ…。相手の奴は魔力を使わなきゃ生きていけない体が、使わなくてもいい体になってんだよ。

差がわからないけど…。大丈夫なんだね。

で、お前の体を直しに来た。
どゆこと？

オマケだそうだ。姉上が、トリートメントのお礼をしろって言うてるからな。全く…。お前の体も魔力を使わない桃源郷の体質に戻して、アルカディアの魔力許容量を肉体魔力分残しといてやる。
んと、ちよつとアルカディアの魔力も使えるようになります？

おう。もう終わったぞ。じゃあな。

ええっ！もう？ちよつと待って！まだ聞きたいことがあぁ！

直後。

キィ、ときしむような音がして戸が開いた。

『お姉ちゃん、ご飯だよ！大丈夫？』

おああ！ピット君…だっけ、驚かせないでよ！
今行くってゝ。

『お姉ちゃん？』

ああそうか、心読めないのか。

全くあの神様たちはどこか心の中に踏み込みおって！今やつと気づいたけど！

『今行く。呼びに来てくれてありがとう。』

ふんわりした居心地のいいクッションから降り、キット君、ああそ
うだキットだ、の後について階下に行った。うゝん、いいニオイ！

新能力（後書き）

キットはまだまだ子供です。多分。
師匠との関係はもう少し先の話で。

*

御感想、ありがとうございます！
どこで答えるのかわからないのでここで。

> 暁 黎様

まだ主人公は異世界を実感してません。
もう少し時間が経ったら変わってくれると思います。
…私の筆力で書けるか不安ですが。

猫又はこちらのツチノコと似た感覚です。
アルカディアでは諸説紛々。

*

更新はこれから不定期になります。
出来るだけ早く書くつもりですが、急に忙しくなりました…。

すみませんm(_ _)m

朝食（前書き）

内容が薄い話です。全く無意味ではないですが……
主人公は可愛さ絶対主義者なので暴走。
で、でもーまるだから許してやってくださいな

朝食

テーブルにはほかほかと湯気をたてる黄金の半熟オムレツが乗っていた。

金だゴールドだ！

うわぁ〜美味しそう〜！

ポーちゃん（仮）料理上手いね！

普通に猫まんまかと思ってた。

ってことは、あのふにふにの肉球でフライパン握ってんのか。

ああフライパンになりたいっ！

悶々と肉球の愛らしさに思いを巡らしていたら、キット君が訝しげな顔をして私の顔を覗き込んだ。

やば、よだれが垂れてたかな？

『…お姉ちゃん？』

『早く席について食べる。』

弁解する暇もなく、ポーちゃん（仮・・・もういつかポーちゃん）が三角巾を取りながらこちらに歩いてくる。

猫って三角巾の意味がない気がする…

……！！

ポーちゃん！その猫用エプロンどこで買った！

ねえなんでエプロンなんて着けて2本足で立ってるの、狙ってるの？
可愛すぎるぞ畜生おお！私の完敗だああ！

うわああ撫でくりまわしたいいいいい

心の中で萌え転がっていたらキット君同様ポーちゃんにも訝しげな
顔をされ、正
氣に戻った。

・・・ええ、今の私は頭がお花畑だったと認めます。
すみませんでした。

じゃ、仕切り直して。

『おはようございます！』

なんとも白々しく挨拶してみる。挨拶は大事ってお母さん言った。
主導権握る
為に。

『あ、ああ。』

軽く面食らったポーちゃん。
が、すぐ立ち直る。む、早いな。

とつとと座れ、と無言の威圧をかけられ、すぐさまキット君の隣に滑り込んだ。

キット君、眉間にしわが寄ってるよ。心読めるんじゃないの？

間もなくエプロンを外したポーちゃんが座り、朝ご飯が始まった。

では早速。

『頂きます!』

ん？気のせいかな暑くなった気がする。今日はいいい天気だね。

あれ・・・????

…ね、みんな。私、体に4つの穴があきそうなんだ。

みんな目からビームが出るんだね、私は熱くて出来なかったよ。

『その呪文は…?』

『お姉ちゃん…？』

2人して臨戦態勢。毛が逆立ってる。そして何でか寒い。さっき暑かったよね違ったっけ？

あ、もしかして。

『頂きます？』

無言で首を縦に振る2猫。可愛い。

挨拶はトリップじゃお決まりか。仕方ない。おはようはOKだったのになあ。

『頂きます、っていうのは作った人と食べられる命に対して感謝する言葉で、私

の育った所の慣習なんです。』

そしてこれはお母さんの受け売りですが何か。

『そうだったんだ。』

話の途中から落ち着いてきたキット君。やっぱり可愛いなあ。

『そうそう。わかってくれた『食前の呪文か』』

ダメだこいつ。

その後、何とかして誤解をとき、ひとまず害はないと納得させた。

どうでもいいからオムレッツ食わせて下さい！

因みにキット君は最初の説明で理解したのに助けられなかった。
隠れSかコノ

ヤロウ。でも可愛いから許す。

『ふむ、つまりは食品に対して祝福の祈りを捧げ、自らに聖霊の加護をかけるんだな？』

『

…はい。しつこいな。呪いも祈りに変わったんでもういいよ。
アーメンな感じだけどね、それじゃ。

ブツブツ呟くポーちゃんを尻目に、微妙に冷めたオムレツに口をつける。行儀悪いけど、猫だから許してもらえると信じてます。
はふはふ食べて、ポーちゃんに美味しい美味しいと連呼。

『そんなに美味いか？』

ええ、美味しいですとも！

味は完璧オムレツ。チーズがとろけてて最っ高でしたよ！

朝食（後書き）

まだ食べ始めたばかりな上にお礼も言っていないよコイツ・

とりあえず次はポー改めクロサイドで書くつもりです。

弟子（前書き）

更新遅くなりました。見捨てないで下さるゲテモノ好きな貴方様に、心から厚く御礼申し上げます。

今回、小難しい事を小難しい野郎に語らせたのが間違이었다気がします…。

読み飛ばしても、後で主人公に理解させるので平気かも。

読みにくい場所を訂正、ご迷惑をおかけしました

弟子

* s i d e クロ *

この猫には治癒魔法が効かない。
寝かせた後に試したが、やはり効いていないようだ。

今日、急に目の前に現れた、美しい銀猫。

“^{サーチ}索敵”で探查不能だった事で、予想はしていた。
少なくとも現時点において余剰魔力が存在しない

という事を。

治癒魔法も“^{サーチ}索敵”も肉体魔力に関係する魔法。
特に“^{サーチ}索敵”は最小限の魔力消費で常に発動し続けられるよう、俺
が構築しなおした呪文^{スベル}だ。
特徴など知り尽くしている。

“^{サーチ}索敵”の感知する肉体魔力は全ての生命体が宿し、常に身体から
多少溢れているものだ。その無い者は存在しないとされている。

無い場合、余剰を身体へ戻す治癒魔法が効かない。
つまり、一般には対処法がない。

一般には、だが。

キットには治癒が効いたように見せかけ、ねぐらに戻らせる。

その後、台所の奥の小部屋に行き、少し考えてから特別に調合した
薬剤ポーションの小瓶を取り出した。

あの猫が俺と同じなら…

2階に上がり、寝かせた部屋にそつと入る。

肉体魔力はギリギリなのに毛艶の良い猫に、先程の仮定が確信に強
まった。

弱い粘性を持つ薄い橙色の液体を匙さじに掬すくい、ゆっくりと口に流し込
む。

顎を持ち上げ、嚥下させた。

途端に嫌そうに眉を顰しかめている。

そうか、不味いか。でも我慢しろ。倒れたお前が悪い。

薬剤ポーションが効くかどうか、しばらく様子を見ようと思っていた。が、見
る間に顔色が良くなっている。

これなら明日の昼には目が覚めるだろう。

・・・お前、ここに来て良かったな。違う場所なら実験材料にされてたぞ。

いや、もしかしたら…もうされていたのかも知れないな。

瞼を閉じた世間知らずな銀猫…しきりにポーちゃんと呼んでたな…知り合いに似てたか？

1人話しかけながら、未だに名前を知らない事に思い当たった。起きたら訊いてみるか。

この時の俺は知らなかったが、その後2日間、^{ボーション}薬剤を飲ませ続ける事になる。

とはいえ健康なのだ。ただ目を覚まさないというだけで。

流石の俺も少し焦った。
何故健康なのに目が覚めない？

問題は^{ボーション}薬剤だ。原料こそ安価だが調合に1月かかる。このまま行けば後2日だろう。

養分も足りていない筈だ。

明日。3日目で起きなかつたら悪いが精神^{インフリンジメント}潜在で無理でも起こすと決めた。

恐らく戦火の中見た景色や覚えた感情が、精神に絡みついて解けないに違いない。やりたくはないけれど、待っていて身体が参るのは本末転倒。

ああ…一体俺は何度禁術を犯すんだ。

とうとう今日で薬が切れる日。

森で覚悟を固めつつ魔草の採集をしていたら、キットが走ってきた。

・・・目を覚ましたのか？

『師匠！目を覚ましたよう！』

『怠惰な奴だな…やっとか。』

目を覚まして、本当に良かった……。全く……。居候が心配なanteかけるな。

部屋に入ったらすぐ、寝床から頭をもたげた彼女が見えた。

顔色も随分よくなったようだ。

肉体魔力の異常と名前を質そうとしたのだが、ひとまずは朝食を作
ってやる事にした。

目の前で腹を鳴らされたら仕方ない。やれやれ、いい加減面倒を掛
けてくる猫だな。

すぐに魔法で調理を行う。本当は人型が一番作りやすいが、魔力消
費が激しく、せいぜい10分しか保てない。

まあ魔法でもそこらの家よりは格段に良い料理ができる。今回は簡
単に卵でいくか。

朝食が出来たと言って呼ぶと、しばらくしてから下りてきた。

俺の運んでいる自信作を今にも食いつきそうに見つめている。

俺が初めてキットに魔法で調理した物を食べさせた時、当初は本物
の食べ物なのかと疑っていた位だった。こんな真っ黄色な食物など
ない。

でもコイツは見慣れているらしい。・・・人間の下に居たんだな。

極めつけに、聖霊への祈り。

『イタダキマス』の意味は分からないが、言った瞬間に純粋な魔力
の奔流を感じた。

整っていて決して不快ではないが、この量を一気に操る能力は異常

だ。母猫がここまで教えるのは有り得ない。魔術士、魔導士あたりだろう。

ここまで考えた所で急に肩を叩かれた。

『ん？どうした？』

『ポーちゃん天才ですね！今度はデザートもお願いします、何でもしますから！』

随分と・・・元気になって良かったな？

『でざーとが何か知らないが努力しよう。だから先払いで自己紹介を頼む。』

不意を打たれたような顔。

お前・・・忘れてたか？

『えっと、ええ…助けて下さってありがとうございました。おまけに3日間お世話していただきまして。私は、シーク、シーク・ヒーラギです。』

『シーク。』

『どのハイラル・・・じゃなくてシークです。』

『シーク、だろう。』

『だから、シークじゃなくてシーク・・・すみません、シークで構いません。』

『シークお姉ちゃんだね！』

訂正箇所が分からないが、シークというらしい。男らしい名前なのは何かあるん

だろう。

『よろしく、シーク。俺はクロシドライト。コイツがキットだ。』

『クロシドライト……クロちゃんが良いですか？』

『ちゃんは止めてくれ。クロでいい。』

『クロ…師匠。』

『師匠は止めてく』お姉ちゃんも弟子になるんだ！』

『おいキツ』クロ師匠！私を弟子にして下さい！』

上目遣いのシークの瞳がキラキラと輝いている。

もう駄目だ。勝てる気がしない。

『はあ、別に俺は弟子をとってる訳じゃない。でもここに住むなら手伝いはしてもらう。それでいいな？』

『はい！…！』

さて、シークの魔力をどう使っかな。

弟子（後書き）

猫又のからくりが少し暴露されました。

1話目で鈴ちゃんが主人公の名前を呼んでいる事にお気づきですか
（笑）

さて、本当の名前はなんでしょう！

クロの説明、ついて行けました？私は無理でした
魔力の説明用ページを作った方がよいでしょうか？
ついでに名前の由来もあかしたいが・・・地名はネタバレに・・・
うう悩ましい（*―*）

食虫植物？（前書き）

今拍手小話を書こうかと画策中。
長くならなかった小話を上げたいのです。

食虫植物？

『別に俺は弟子をとってる訳じゃない。でもここに住むなら手伝いはしてもらう。それでいいな？』

『はい！』

クロちゃんの言葉にキット君と一緒に返事をした。

キット君も正式に認められてなかったんだと言っていた。

こんないい子を今まで認めないなんて・・・クロちゃんの鬼め！

んで、そんなこんなで朝食の片付けをしている。

シンクは低い位置にあるし、猫のまま洗い物が出来る。創意工夫は星5つ！

何かね、もう食器も可愛いんだ。木をくり抜いてすべすべに加工されてる。

お椀を洗ってたら小さく『キット』とか『クロ』とか彫ってあって・

・
見つけた時は息が一瞬止まった。ナニコレ…ナニコレ！かわいいっ魔法覚えたら名前の横に似顔絵の小さな焼印を入れようと決意した。ええ気合いを入れましたとも。

洗い物が終わったら庭に來い、と言っていたから多分そこで聞けるような気がする。いや絶対聞く。

お日さまの下で見る庭は、最初に見た夜の庭とは少し違う。

夜の庭はうすぼんやり光ってた気がしたんだけどなあ・・・？

ぼーっと花壇を眺めていると、クロちゃんがやってきた。

『・・・トラップには嵌ってないな。で、シーク。お前は“猫又”だな？』

シークじゃないの、椎^{しいか}香なの。もういいけどね。

呼ばれる度にどこのシーカー族、どこのお姫様！？なんて恥ずかしさに襲われる。

いやそんな事言ってる場合か！猫又ばれとるやん！

速攻だね！

『え・・・と・・・』

『違うのか？不可解な事が多々あるとはいえ魔力量は完全に猫又だぞ？』

クロちゃん猫又！？

『っ、小さい頃に両親を亡くしていて、よくわからないんです・・・』

お母様お父様、殺してしまってますみません。娘のピンチを救って下さい。

『ふむ・・・。“猫又”は普通の猫より魔力が高く、変身能力、あ

る一定の人型形態になる能力を持つ希少な猫。基本的に遺伝だ。変身能力と言っても、魔力は使う。だが変身魔法が存在しない事を考えれば十分特異な能力だな。』

天然記念物みたいな物？

道理で最初から猫又だったんだなあ。なるほど。

『お前は人間に育てられたんだろう？この事は人間の間では流布していないからな・・・知らなくても仕方ない。魔力の扱いは誰に習ったんだ？』

『お姉さんが・・・少し。』

嘘はついてない。嘘は。

『姉か。姉は誰から・・・違うな。お前は誰の下にいた？二ネベには高名な魔師はいない筈だが・・・』

魔師？何だ魔師って？猫又のブリーダーか？

『・・・』

『名は明かせない、か。』
『すみません。』

分かんないんだ言葉の意味が。
でも、ついこの前この世界に落ちてきたからそんな怪しげな人には触ってないハズ！

『いや、単なる好奇心だ、忘れる。』

『クロ師匠は猫ま』で、庭に呼んだ用事だが・・・』

おい！と言つ間もなく、
あれに乗れ。と言つてクロちゃんが指差す。

・・・私、視力落ちた？

は、え、アレ何？食虫植物のデカイバー^{ヘンタイ}ジョンが見えるんだけども？
死ねと？お前は死ねと言いたいんだね。

よく見てみると、ビーチボール大の水晶から、同じ水晶の茎が伸びている。

水晶の茎が、先に行くにつれて薄緑、濃緑、赤緑に変わっていく。
一緒に透度も下がっている。植物になつてゐるのかな？
そして先端が枝分かれして、それぞれがハエ捕り草の葉をつけている。

カパツと開いた葉っぱの端のトゲトゲが、いかにも「捕食します」と主張してて非常に恐怖を煽る。

『喰われる……』

『何言つてゐる？大丈夫だから早く乗つてみる。』

絶対大丈夫じゃないがクロちゃんに頼まれたら仕方ない。やらねば女がすたるぜ！いくぞ！
かわいいコ

思いつ切り跳躍した。ら、ジャンプが高すぎて怖い。まだ浮いてるよ！？まだ上に向かつてるよ！？

神様、加減をしてくれっ！

それとも猫には普通なのこの高度〜！？

・・・じゃないね。

下を見下ろして、はしが掛かっているのを見つけましたよ。

ほらクロちゃんもビックリしてるじゃん！もう！

いつの間にかキット君も出てきてるし！

色々考えながらハエ捕り草の上に降り立ち、やっぱり捕食された。

逃げる隙もなく一気に閉じた。

卑怯なりクロ左右衛門！

でも真っ暗って訳じゃない。葉が薄いらしく、少し日が透けている。色がちよつとエグい。

これ逃げたらダメかな。何か分泌されたら逃げよう。

少し我慢していると、徐々にきつくなりだした。体にフィットして感じがする。

あゝ気持ちええ〜。マッサージされてるみたいだ〜。

縮まるのが止まった後、体の表面にほんわかとした薄い膜が出来て包まれた。

これって魔力？

人間になった時は暑くなつたよね？確か。

・・・眠い。どうでもいいや。

ふわぁあ...

しばらく身を委ねてウトウトしていたら、急に葉が開いた。
名残惜しくなりつつ葉を下りる。はしごは面倒だから飛び下りたら
キット君がビビってた。

撫で撫でしたい。可愛い。

早速実行にうつし、散々キット君をもふもふした。
はうう気持ちいい！

ふと振り返ると、クロちゃんが巨大ハエ捕り草の根元の水晶をじっ
と見ている。真剣にブツブツ呟いていて非常に危ない。

『クロ師匠、今のは何ですか？』

『・・・魔力測定器。』

どんだけ物騒な測定器だよ！

て事は、肉体魔力分しかないから小さすぎて驚いてるのかな。ザナ
ドウの魔力は多分計れないだろうし。

『どうでした？』

『ああ・・・異常だ。』

『少なすぎですか？』

『いや・・・というよりも・・・魔力について、どれだけ知ってる？』

『全く知りません。』

『肉体魔力と個体魔力については？』

『肉体魔力は聞いたことがあります・・・？』

『何で疑問文なんだ。お前、本当に習ったのか？』
『少し。』

ば・れ・る！！

どうすんの、バレてもいいの？

お願い時間を止めて、泣きそうなの！

食虫植物？（後書き）

メルトが思い浮かんだ人は大正解。

こんな感じでちまちまとマニアックに…つい。

ごめんなさい（*——）

今回はちょっとキリが悪いんですが長いのでバッサリ切断。

魔力の説明だったよね？（前書き）

どうしてこんなことに。

魔力の説明だったよね？

当たり前だけど願いが通じる訳もなく。

クロちゃんが軽いため息をひとつついて、

『…まあいい。軽く説明してやる。』
とおっしゃった。

もうバレバレだった？てへ。

すみません大人しく話を聞きます。

『まず肉体魔力だ。これは生命維持に必要な不可欠と言われている。
勿論生物の身体が使う魔力量には波があるから、対応できるように
ある程度の余剰が出ている。』

火力発電所の発電量も確か真夏の最高発電量に合わせてキープして
るって先生が言ってた気がする。
その人間バージョンみたいな感じかな？

『個体魔力は元々本人の魔力ではない。世界から吸収するんだ。肉
体魔力の余剰が多い者ほど操れる個体魔力が大きい事から、余剰分
が世界から吸収する受け皿の役割を果たしているという説がある。
個体魔力の使いすぎは死を招く、それも証拠の一つとして挙がるな。
俺は・・・俺の見解はどうでもいい。』

私、そもそもその肉体魔力とやらが無いんですが。
アルカディアで魔法使ったら即死ですか？焼印の夢はもう潰えた？

『つまり普通なら、肉体魔力と個体魔力は比例する。肉体魔力を計るだけなら簡単な装置で済むんだ。常に生産量は一定だからな。』

ふむふむ。

『だが、お前は“^{サーチ}索敵”にかからなかった。肉体魔力が生産量だけ使われているか、或いはないということだ。』

最初は普通の身体だったはずだから、ギリギリだったんだろうな。あの日は1日で色々あったしな……。

^{たそが}黄昏れそうになる私を尻目に、クロちゃんは続けた。

『今日の朝の具合で肉体魔力がギリギリとはおかしい。だから、肉体魔力と個体魔力、どちらも計れる測定器に入らせたんだ。』

『個体魔力も計れるんですか？』

『ああ。寝ている間しか回復しないから朝に計らねばならないし、誤差も肉体魔力の場合と比較して大きいから好まれないがな。』

『私、変な所ありました？』

『見る。』

水晶をよく見ると、うつすらと文字が浮かんでいる。

肉体魔力：000

個体魔力：050

あゝ……異常なの？

『肉体魔力がない。それどころか一時は0以下になっていた。負の数は存在しないのに……。だ。そして個体魔力50。これはお前の

体重など諸々の点から見て妥当とされる肉体魔力値だな。』

ん？魔力量以外に何か量ってんだ・・・？

『・・・クロ師匠。』

『そうだ、お前は『何勝手に体重量ってんだゴラァ！』』

何と、体重・身長・体温：等々、挙げ句インピーダンスらしき数値まで出ていた。

仮にも雌相手に脂肪率なんて出して許されると思うなよ！！

『っ、おい、^{ホールト}“停止”』停止じゃね〜！今の記憶全部消しやがれ！
！もうお嫁に行けないっ！っ！！』

さっきHALLTって言ったな？英語で魔法かければいいのか！？よしやったらあつ！

『^{メモリー}“記憶…うぶ”』

『お、落ち着いてお姉ちゃん！何しようとしてるの！？』

キット君が実力行使。口を塞がれた。

止めてくれるなキットよ。お姉ちゃんは修羅になる！

・・・っつか一部消去って英語で何て言うんだろ。

デリートとかイレースとか、廃猫になりかねないよね？

英語がネックだぜ。やっぱり勉強しときゃ良かった。自動翻訳は英語をマスターするのとは違う訳ね。

あ・・・クロちゃんがなんだか呆然としてる。

『あの・・・すみません。』

『いや。』

『もうしません。』

『師匠、女性の体重はダメだよ。事前に言わなきゃ。』

『ああ。』

『脂肪率も出してますよね』

『ああ。』

んだと？オイ反省なしかつ！

怒りのオーラを放つ私を見てキット君が少し笑いかけてきた。
なに？

『師匠、お小遣いちょうだい』

『ああ。』

『10キルね』

『ああ。』

なる、分かった。

『クロ師匠、私にも10キル』

『ああ・・・ああ？』

私の時は我に返るのかよ。ちえっ
キット君が喜んでる。10キルってどれ位か分からんが高額に違
ない。いいな。

『悪い、聞いてなかった。』

『師匠、10キルくれるって言ってたよ』

『は？』

瞳孔が縦に細くなってる。これは目が点の猫版？

『私にも。』

『それはない。』

即答か！

『とりあえず、シーク！お前、さっきのもう一度やってみろ。』

『え、しばいていいんですか。』

『しばらく？まあやってみろ。』

よし。

拳を固めて…

ゴム○ムの銃弾^{ピストル}！！

『^{ハルト}停止』
『』

お？止まった？体が動かないい

魔法だ！すごい！

・・・デジャヴ？

『さっき私にかけました？それ。』
『かけた…つもりだったが。』

私絶叫してて魔法にかかってなかったですね。
ごめんなさい？でいいのかな？

『師匠が失敗するなんて珍しいね？』
『さっきも今も魔力は使われてた。』
『え？』

『シークが特異体質…の訳がない、今現に効いた。おかしいな…。』
『よく把握できないんで、魔法について教えてくれませんか？』

頼みます、私に基礎知識を！
この状態で悩まれても困るよ。

『そうだな、50じゃロクな魔法は使えないから、魔術だな。』
『違いがある？』
『お前は本当に猫又か？』

もうバレるとか心配する以前に、コッチが何も自分の事を知らないからね。

この際クロちゃんにはなあなあにしておこう。勝手に悩んで。

『お姉さんも魔法…魔術？の使い方しか教えてくれなくて。』

『何て教わった？』

『ギユツ、バンツて。後は念じる。』

『はあ？それだけか？呪文^{スペル}は？魔具は？』

『他は何も。』

『それだけじゃ魔法も魔術も発動しないぞ、ただでさえ個体魔力許容量が低いんだから。』

『でも人間になれま』

おっしまった。

『なれま？』

かくなる上はあの手を！

『すん。』

『よし、やってみろ。』

すんってさ…すんだよ。すじやないだろ！

名前といいこれといい聞き間違い激しいねクロちゃんよ。

もういいや、人間の姿見せちゃうか。

魔力の説明だったよね？（後書き）

ストック無し…恐怖。。

英語の発音を間違えるという大失態を犯しまして、少しは改善したかと思っています。

ん？と思った方、申し訳ありませんでした。

魔力の違い（前書き）

色々妄想が膨らむのに主人公の身動きが取れないのが、
非常にもどかしい。

魔力の違い

人間の姿になろうとしてから気がついた。

私、まだ服装調査してないんだけど。

クロちゃんに怪しまれるから、ジーンズ&Ｔシャツはダメだろう。かと言って全裸はあり得ないし。

シーク、ピーンチ！

・・・ってかシークの格好でいいんじゃない？何かワケアリみたいで誤魔化せるかも。

『シーク、無理なら無理でいいんだぞ。』

む。嘘じゃないやい。

いくぞ、変身・シークver.！

シュルっ

顔は目だけ出した状態で、後は灰色の布で覆われている。

青と灰を基調とし、実用的で体にきつくフィットしたデザイン。髪の毛もきつい三つ編みで後ろに垂らされている。

悲しいかな体は美幼・・・美少女だから、イマイチ体の線が迫力に
かけるけども。

『お姉ちゃん・・・』

『シーク・・・』

正直自分でも完成度の高さにびっくりしてマス！やったね！

『男なの？』

・・・成功しすぎた。

『お兄・・・お姉ちゃん、無理言ってごめんね。』

キット君、残念な物を見る目は止めようね。お姉ちゃん心が折れて
しまうよ。

とりあえず猫に戻ろう。

シュルッ

『私は男じゃありません。』

猫の笑みなんて見たこともないけど、飛びきりのスマイルを浮かべて言ってみた。

『あ．．．うん。僕、あっちに行ってるね。』

キツト君、苦笑いしつつ後退りないでくれ。器用だな。
あ．．．行っちゃったよ。

『別に性別はどうでもいい。変わった姿で全く魔力を使っていない
ようだから、魔法じゃないな。一体何をしたんだ？』

どうでもいいんだ．．．。

『多分、本来の人間の姿に変わったただけだから？』

『本来？それは当たり前だ。他の姿になれる筈がない。』

『神様から貰ったというか．．．勝ち取ったというか．．．』

『魔力は？』

『ザナ．．．異世界の魔力です。なんてね。』

『疲れてるのか？』

うう、冗談っぽく発言したけどここまで信じて貰えないとは。

『ちょっと事情があって、少しで済むんです。』

『少しも感じないぞ。』

はい？

一応変身の時に尻尾はあつたかくなってるんだよ？

これはもしや。

『すみません、火の玉みたいな物を出す呪文^{スベル}、だっけ？教えて下さい。^{い。}』

『ファイヤーボール
“火球”だが、強めなければ使えないぞ？』

『ちよつと確かめたいんです。尻尾の上を見て下さいね？』

人型に変わる寸前まで、尻尾の先に魔力を集める。

『どうですか？』

『何も変わらないが？』

ほうほう。

じゃあ、尻尾に集めた魔力を散らしてから

『ファイヤーボール
“火球”』

小さな火が尻尾から少し浮いて出た。でも尻尾はヒンヤリしている。

『どうですか？』

『普通の火球だろ？』

『いや、魔力は。』

『燃料として使われてるぞ。』

なるほど。という事は、

・アルカディアの魔力はクロちゃんにも分かる。魔力自体は冷たい？

・ザナドウの魔力はクロちゃんには分からない。魔力自体は温かい？

使い分けは……念じると話すの違いかな。後で試してみようっと。
うん、こんな感じかなあ。

『何か違ったか？』

『や、失敗しました。』

『そうか……。魔力が要らない理由かと思ったが……。』
う、ごめんなさい。

『ふむ……。そうか。ところでお前は魔法や魔術がどれくらい使えるんだ？やはり個体魔力分か？魔力を使わないのは変身時だけか？』

いっぺんに訊かれても分からないって！

『魔法と魔術の違いってなんですか？』

* s i d e キ ャ ャ *

お姉ちゃんが変身を披露してから、師匠の雰囲気が変わった。

師匠には魔力が視えるらしいから、お姉ちゃんに何か特別な物を見
いだしたに違いない。

お姉ちゃん・・・お兄ちゃんだったみたいだけど。

男じゃないと言って吊り上げた口元が怖くなって逃げて来ちゃった。
家の窓から、師匠達が見える。

師匠と話していたお姉ちゃんがふと考える素振りをしたかと思うと、
何かの呪文^{スぺル}を師匠に尋ねた。
何をするんだろう！

ワクワクしていたんだけど、お姉ちゃんは静かに目を閉じている。
何も起こらない。

師匠の深緑の瞳が金に変わっている。しっかりとお姉ちゃんを見据
えているけど、何を視ているんだろう。

何も起こらないままお姉ちゃんは目をあけ、師匠と二言三言かわし
た。

次にお姉ちゃんが発動したのは、初級魔術の初歩“^{ファイヤーボール}火球”。
詠唱破棄でもない基本の基本で、どこの人間の子供もこれ位なら普
通に使える。

それに、火もどちらかと言えば小さめな気がするんだ。何が特殊なのか、よく分からない。

火を消した後、また2人で話している。

しばらく見ていると、急に辺りの魔力が師匠の元に集まり始めた。すごい勢いに空気も巻き込まれ、強い風が吹き荒れる。

わあ
……！！

師匠がこんなに魔力を集めるのは珍しい。

魔力は徐々に自然へ満たされるものだから、一気に使うと何日かは強い魔法や魔術が使えなくなってしまうと口を酸っぱくして言っていたのに。

見に行きたいけど、師匠の周りの魔力濃度が高すぎて近寄れない。こういう時に僕は普通の猫なんだと実感する。ちょっと悔しい。

お姉ちゃんは耐えられてるのかな？

クロの本領（前書き）

拍手メッセのお返事は活動報告ですることにしました。
拍手＆お気に入り登録、ありがとうございます！

クロの本領

魔法は莫大な世界魔力を使って強引に世界を曲げる業。

魔術は世界に願って個体魔力で実現させる業。

大して変わらないじゃん！と言ったら、

『魔法を見せてやる。』

とゆっくり微笑まれた。

・・・なんか気に障りました？敬語が取れた事に怒ってるんですか？
目が笑ってないのに楽しそうで怖いです！

そしてなぜか今、私はクロちゃんの張った結界の中にいるらしい。
見えないんだけど、とりあえず謝りに行こうとしたら鼻を打った。

せめて一言いえや！鼻血出たらどうすんだ。鼻血染めの毛皮なんて、
怖がっていいのか笑っていいのか分からないぞ。

諦めて大人しく眺めていたら、クロちゃんを中心に薄く水色がかつ
た竜巻みたいな物が出来てきた。もうクロちゃんの姿は霞んで見え

ない。

竜巻の中心でさ、確か真空に近いよね？すごいなクロちゃん！

ショーを見ているつもりで手を結界の壁につけて見ていたら、竜巻が急に収まると共に壁が溶けるように消え、またまた鼻を打ちつけた。

だからさ、一言いおうぜって。

クロちゃんの方を見ると、肩で息をしていた。

駆け寄って大丈夫か尋ねたら、無言で頷いて地面を指差した。

違った、地面じゃなくて宝石だった。

『これは！？』

薄い水色をした丸い宝石。

これが名高いカボーシヨンカット（多分）！初めて見た！

『魔晶だ。見たのは初めてか？』

『はいい！』

ヤバ、声が裏返った。

魔晶って言うのか。凄い凄い！

これ、ダイヤモンドとどっちが硬いかな？でもカットしてる（？）し…。

ああ欲しい。これ欲しい。んで調べたい。

『私に作り方教えて下さい!』
『は?』

その後、懇々とお説教された。
曰く、これは無理やり魔力を固めた物で、取り扱いが難しいとか。
売りに行くんだとか。私がやっても砂くずレベルだとか。

途中からキット君が戻ってきて、余計恥ずかしかった。
そこまで言わなくてもいいじゃんよ。頑張ってザナドゥのを固める
もん。

『これで分かったな?』

ちえ。

『これっぽっちも分かんないなんて言わないよな。』はい・・・。
『

呆れ顔で溜め息をつくクロちゃん。たった1時間で何度この光景を
見たことか。

よし。必殺 うるうる上目遣いを
効かないぞ。』

まだやってないのに。流石に毎回はダメだったか。

『お姉ちゃん、魔晶が造りたかったの？』

うんそうなんだ。でも隣でお説教聞きながら待っててくれなくていいんだよ。

あのね、こんな可愛い子に失態を見せるのは泣けるんだ。

『魔晶かぁ・・・僕はいつも見てるだけだから解らないなあ。』

『“結晶化”とかかな？どうよクロ師匠。』

『魔法だと言っただろう、呪文^{スベル}を考えても無駄だ。』

『へ、なんで？』

『凄い自信だな・・・。魔晶はな、世界魔力を操って造る。個体魔力を操る呪語じゃなく原始の言葉を使う。』

『原始？』

『ああ、例えば』

クロちゃんが二足で立ち、無造作に右手を広げる。

『ウォーターボール
“水球”』

野球ボール位の水の塊が浮かぶ。へええ、あんな風になるんだ！重
力って美味しいの？な世界だね。
物理も要らなかったか…。

『コレが魔術の場合だ。今は魔晶を作ったせいで少し小さいかも知れないな。で、コレが』

『アクアスフィア
“水球”』

……水がラテン語？
と思った瞬間。

クロちゃんの左手に、

ビーチボールのめちゃくちゃ大きい感じの奴が。あれは人間になっても抱えきれないと思う。

ってかさ

威力の差がヒドすぎ。

やはり世界魔力が薄いか…なんて呟いてるが意味不明だよ。
クオリティーは十分高いって！

『このように、言語が違くと威力も全く違う。』

『あの、どれ位？』

『本来ならざっと100倍だ。』

100倍！？

『じゃあ弱い方要らないでしょ？』

『使い勝手の問題だ。原始の言葉はまだまだ解明されていないから使えない上、威力調節が少し難しい。』

『少しじゃないよ、ものすごく難しいんだよ！僕も練習してるんだけど、1つ使う位で倒れそうになっちゃうんだ。』

『倒れ・・・っ！』

『キットは無理し過ぎだ。』

『大丈夫なの？』

『うん。』

『そっか、無理しちゃ駄目だよ？』

『平気だよ。ありがと、お姉ちゃん。』

はああ、可愛いねえ。目がキラッキラしてて。悪い人について行っちゃ駄目だからね。

…なんならお姉ちゃんどこに来る？

原始の言葉だろうが何だろうが頑張ってマスターするからさ？

あ、そうだ。これ聞いておかないと。

『普通の人は使えたりします？』

『人？微妙だな。魔師・・・魔術師や魔導師の事だが、そいつらは使えるが、一般人は魔力が足りるかどうか。』

『足りないとうなるんですか？』

『良くて発動停止、んで気絶するな。』

ということとは最悪の場合……。

おっけ、魔法は何とも危ない代物だと認識した。

だが、やらなきゃならない事もあるのさ。

『キット君、魔法が使えるお姉ちゃんは好き？』

『シーク、何言ってるんだ！？』

クロちゃんはまだもふもふ出来る仲じゃないから聞けないし。
勿論いつかはもふもふやりますけどね！

『うん、カッコいいよ。』

『そうかあ、そうだよ。クロ師匠、という訳で魔法と魔術教えて下さい！』

『それ位の覚悟で……』

怒り顔で口を開いたクロちゃんが、なぜか少し逡巡して口を閉じた。
しゅんしゅん

あれ？てっきりたしなめられるかと思ったのに。

また開いて、

『わかった、教えよう。授業料はきっちり貰うからな。
ポーション薬剤分も。
払い終わるまでは俺の指示に従え。』

『はい！』

『じゃあ、夕飯を作れ。もう遅いから明日教える。』

いいよ、夕飯ね！なんて軽く安請け合いしたまでは良かったけど、まさか魔術でやらされるとは・・・。

英語の試験より格段に辛かった。包丁なんて英語で言えないよ！

クロの本領（後書き）

誤字脱字はお知らせください。 作者は只今38 の熱を出しています。
夏風邪はなんとやら、です。

因みに包丁はキッチンナイフでOKです。 安易安易

異世界の夜（前書き）

シリアスなので短いです。

昨日拍手のお返事をし忘れた上大矛盾を見つけたので修正いたしました。

異世界の夜

* s i d e クロ *

1日で色々あったせいだろう、キットもシークも早々に床に就いたようだ。

だが、俺はなんとなく眠れずにいた。

庭に出て、空を仰ぎ見る。

満月に一歩足りない月が明るく照らしだす。

薄く光る幻想的な庭は、キットの努力の賜物だ。俺1人だった時は、^{トラップ}畏ばかりで雑草は伸び放題の荒れた庭だった。

最初は反対したが、綺麗な庭になってみれば悪くないと感じる。

玄関の階段に座り、ただ何も考えず眺める。

ふと、奥に一際光る影を見つけた。またキットが新しい花を植えたのかと思い、視線を向けると・・・動いた。

侵入者！

『ホールト 停止”！サイレント 静寂”！』

とつさに動きと口を封じる。
急いで影に近づいた。

『……お前か。寝てたんじゃないのか？』

そこに居たのはシークだった。全く俺に気がついていない。それどころか魔術に掛かった事にも気がついていないようだ。
微動だにせず、一心に木を見つめている。

確かに今が花盛りだが、そんな珍しい木ではない。

シークは黙って薄紅の花弁がはらりと落ちていく様を見守っている。

銀の毛並みが月の光をはね、風景とあいまって精巧な絵画のようだ、
と思った時。

かさり。

不用意に踏んでしまった植物が、音を立てた。

途端にシークが振り返る。その眦からは涙が溢れそうになっていた。

『・・・どうした。』

『何でもないよ。この桜キレイだね。』

無理に笑おうとして、顔が歪んでいる。

『サクラ。』

『ああ、元いた所では、この花を桜と呼んでたんです。私の国の花で・・・最後に見た景色がこの木の花吹雪でしたから。』
後ダンブね、と言って顔を背けた。

『そうか。』

ダンブ・・・が何だか分からないが、彼女の家族の命を奪った何かだろう。

『こんな些細な事で寂しくなるなんて・・・あはは。ちょっと引きずってるんです。まだ踏ん切りが着かなくて。いやはや、ネチっこい性格は嫌ですな。大体私らしくないし。』

饒舌に話し出すシーク。決してこちらに顔を向けようとせず、軽い

口調で話す。

やれやれ。そこまで耐えなくてもいいというのに。

『親^{ちか}しい者が居なくなつて簡単に諦められる奴はいない。』
『うん…』

『でも1人で耐えなくていいんだ。少なくとも今お前の周りには、俺とキットがいるだろう？ 苦しいなら苦しいと言え。いくらでも一緒にいてやる。』

『誰もお前の悲しみを取り除けないかも知れないが、共に背負う事は出来るんだ。』

言い切つてからシークの正面に回りこむ。

涙は止まったようだった。

『クロちゃん……。』
『なんだ。』

『今、口説いてた？』

……は？

『なんちゃって』

ありがとう。

ぎりぎり聞き取れる位の囁き声が聞こえた。

そして唐突に、

『じゃあ疲れたからここで寝かしてね。』

と言つて、木にもたれて寝始めてしまった。

なんだったんだ。

拍子抜けしたが、幸せそうな寝顔を見ていたらそんな事はどつても良くなった。

今は穏やかなこの時をゆっくり過ごしさえいい。

俺もシークの横で一眠りしよう。

異世界の夜（後書き）

ごめんなさい。本当にごめんなさい。
シリ阿斯は苦手なんです心底。

修行は要らない？（前書き）

修行部分は書かないと…と思いついて書き直しました。

修行は要らない？

ほら起きろ！

夢と現を彷徨^{うろた}っていたら脳内に大音声でユルい声が響いた。

お、イケ神さん。

久しぶり。

いやいや、久しぶりって…まだ1週間経ってないし。

まあな。いずれにせよお前にやいい知らせだ。これやる。

言い終わるや否や、いきなり固い物が落ちてきた。ちょっと待て、これってさ、

電気辞書だ。嬉しいだろ？

電子辞書でしょ。てか要らん。この世界では役に立たないし。中開けた？

だってこれ私の使ってたやつ。入ってるのは、広辞苑とか…と思いつながら開いたら。

魔導書大全…だとお！！来た！来た！ナイスファンタジー！

要らないなら持って帰ろうかなあ。仕方ない。

待ってええ！許して下さいごめんなさい！

というのは冗談で、使いやすくしておいたから説明するな。

冗談……、お願いします。

まずは魔導書。緑、赤、茶、黄、青……つまり木、火、土、金、水の基本5属性だ。プラス黒、白、血、召喚、禁断がついてる。知らなくても全辞書検索で火の玉だの光の柱だの打てば見つかるから。プラスって、あっさり流していいのかな。駄目だろ。

で、オリジナルのために英和と羅和辞典。文章にした方が強くなるから、お好みでつてな。

ラテン語？

気付いてるだろ。原始の言葉だよ。英語が呪語になるほど。じゃあなんで訳す方だけなの？

とりあえず相手の詠唱だけ分かりやいいだろ。

私も使いたいんですが。

ラテン語使って魔法やるなら日本語でやった方が早いし効率もいい。しかもお前は念じるだけで自分の話す言語を変えられるしな。日本語！いいねいいね。ちょっと使うの大変そうだけど。

次はステータス。お前自身のザナドウとアルカディアの残魔力量だ。加えてカメラで撮影した相手の魔力、体力、知性、俊敏性、使った魔術・魔法で主要なもの、名前もわかるっつー代物だ。へえ〜！

試しに自分に向けてパシャっ。

ザナドウ魔力・エラー

アルカディア魔力・025

魔力・D

体力・エラー

知性・エラー

俊敏性・エラー

魔術、魔法履歴・火球、変化
名前・柊 椎香

何だろう、この切なさ。

体力と知性のエラーはきつと低すぎだからじゃないかと思う。絶対
そうだ。泣きたい。

お前相手に計るなんて想定してないからな、あははは。

・・・さいですか。私は尋常じゃなく馬鹿ですか。

でも読み手はお前相手だぜ？日本語はなかなか読めるもんじゃないし。

ん？話せる人はいるの？

極少数だがいるぞ。一握りの魔導師だな。魔札職人で日本語が書ける…奴もいるか。

日本語知ってる人！？会いたいです！

誰かに教えてもらえ、じゃ

え、待つ、この項目は？

それは見りゃわかんذار。料理レシピに、商品の価格レート。

こんな時代にレート。

悪い奴には引つかかるなよ。と、言い忘れてた。電気辞書、お前の脳内にしまつとくからいつでも出せるぞ。またな。

プツンと途切れる音が聞こえ、何も聞こえなくなった。

待て！

『頭にしまうとか！』

絶叫で目を覚ました。

目を開けると、昨日の桜っぱい木の下。死体埋まってないよね。まさかね。

隣にはクロちゃんが寝てる。起こさないように・・・。

まあ、あの、絶叫してスミマセン。

朝の風に黒い毛がそよぐ。光が暖かく差し込んで、優しく照らす。時たま耳がびくりと動いている。

あー穏やか……。

あー………っ何ですかその無防備さ！撫でろと？愛でろと？枕にしろと？

くたりと脱力した姿が抱き枕の観を呈してるよ！

必死で触るのを耐えていたら、クロちゃんが目を開けた。

あ…。

パッチリ目が合った。私が覗きこんでいたせいだね。ごめん。

『おはよう?』

クロちゃんがフリーズ。

一拍置いて、返事が返ってきた。

『しづいます?』

そこで敬語を指摘っ！

……ん？

『おはよう…おはよう?』

ブツブツ独りで話してます。正直怖いよおい。

『おはよう、って言わない?』

『いや、久し振りに言われたなと思って…。』

『久し振り?』

『夜は魔力が抑えられなくて、無意識で…。』

そこで寝ぼけ顔クロちゃんがガバツと跳ね起きた。

『お前、怪我は!』

『何を急に?』

『殺してしまったか。夢枕に立つなんて……。どんなに詫びれば
よいか!』

待て、わたしやまだ生きとるよ。ピンピンだよ。

『一体どうしたの？私はまだ生きてるよ。』

『すまないが、お前はもう死んでい』

ダメええ！それ言ったら何か分からないけど何かがヤバイ！

ふ口閉じろっ

思わず日本語で言ったら

クロちゃんが吹っ飛んだ。

ヤバイヤバイ、攻撃になってしまった。
二次災害起きてるし。

着地点にはキット君とクロちゃんが伸びていた。
こんな事ってあるんだね。あはは……。ごめんなさい。

走り寄ると、完全に気絶していた。
今こそ辞書かな？

取り出して起動。

カタカタ。

検索くく癒し、と

青く 治癒

癒しの水

リヴァイアサンの巢

． ． ．

白く 光の加護

絆の守

天使の微笑

． ． ．

黒く 癒せぬ傷

血く 犠牲

召喚く アスケレピオス

インドラ

ウンディーネ

． ． ．

何だこれ．．．。

まず第一に仰々しい名前で分かん。しかも癒しで引いて癒せぬ傷
って酷いな。

とりあえずベホマはないの？

ケアルガでもいいけど。

ま、治癒でいいかな。

なになに？

ハ強く念じて、ホイミ！と叫ぼう！治癒っばい奴発動するよ！ハ

・・・書いた奴出て来い。

じゃあ天使の微笑は？

ハ強く念じて、ケアルラ！と叫ぼう！ハ

ケアルガじゃないのね。分かった。もういい。

ハ治れハ

最初から日本語ですれば良かった。全く。

修行は要らない？（後書き）

『猫語』

「人間の言葉」

「日本語」

“呪文”

で分けることにしました。紛らわしくて済みません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9531m/>

猫になって

2010年11月14日01時28分発行